

第76回車座集会意見交換内容（宮前区）

- 1 開催日時 令和7年9月6日（土） 午前10時00分から午後0時02分まで
- 2 場 所 宮前区役所 2階ロビー
- 3 参加者等 参加者13名、傍聴者約10名 合計23名

<開会>

司会：それでは、定刻となりましたので、ただいまから第76回車座集会を始めさせていただきます。

私は、本日の司会を務めます宮前区役所企画課の玉井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

まず、本日の開催趣旨について、ご説明いたします。

宮前区には、アーティストとして活動している区民が多い一方、こうした活動や作品を発表する場所が少ないことが課題になっており、アートを展示する場所として、区役所等の公共施設の活用をきっかけに、区内の民間施設に広げるなど、アーティストの活動の場の確保と区民がアートに触れる機会を増やしていくことを目指して、「アートでつながる宮前区」を車座集会のテーマといたしました。

本年5月には、地域の課題について議論する場である宮前区地域デザイン会議において、アートの可能性等について議論を行いました。

本日は、アートに関する区内の取組等を紹介させていただき、ご参加いただいている皆様からご意見を伺いながら、アートが持つ様々な可能性に期待し、区の魅力発信や地域課題の解決等と掛け合わせながら、アートを通じて様々な人がつながるまちを目指して、福田市長と参加者の皆様に議論し、この取組を区内に広げていくきっかけをつくれたらと考えております。

それでは、本日ご参加いただいている皆様をご紹介します。

お名前をお呼びいたしますので、手を挙げていただきますよう、よろしくお願いいたします。

鷺沼で、アーツカイロプラクティックさぎぬまを運営し、自らアーティストとして活動しながら、店舗に作品等を展示している朝倉穂高さん。

宮前区在住のロシア人写真愛好家で、宮前区で撮り続けた写真を集めたネットギャラリー「みやまえ日和」を開設したほか、区内のカフェなどで写真の展示を行っているアレン・スミルノフさん。

川崎市アートコミュニティ形成プロジェクト「こと！こと？かわさき」の第2期ことラーで、イラストレーター・グラフィックデザイナーとしても活動されている安藤尚美さん。

宮前区のグルメやイベントの情報をウェブ上で発信する「鷺沼ファン」の管理者である石川甚敬さん。

建築・デザイン・不動産などの領域を横断して様々なプロデュースを行うbonvoyageの代表取締役で、鷺沼駅前のcafé&bistro SUBURBを運営されている和泉直人さん。

宮前区において、不動産仲介等を行っている株式会社電通ハウジングに勤務され、コミュニティサイト「ふらっと宮前区」の管理人としても活動されている稲木一幸さん。

平にある「地域活動支援センターアトリエ言の葉」の施設長である大高玲さん。

美術家として活動され、2020年度の川崎市市勢要覧「カワサキノコト」の表紙デザインも担当していただいた京森康平さん。

菅生ヶ丘で、子ども食堂、障がい福祉サービス、コーヒー販売等を行う「エリーズカフェ」を運営されている小林貴大さん。

宮前区役所道路公園センター所長の武久倫也さん。

株式会社クリップの代表で動画制作等を行っている宮本哲也さん。

イラスト、壁画、ボディペイントなど絵描き屋として、Ketty（ケッピー）の愛称で活動されてい

る武藤慧子さん。武藤さんには、この車座集会の時間の中で、市内企業である日本理化学工業さんが販売している窓ガラスにも描ける絵具、キットパスを使ったライブペイントに挑戦していただきます。

総合川崎臨港病院の理事長で、病院で時間を過ごす子供たちから不安な気持ちを取り除き、アートの作成を通じて、入院生活を楽しく過ごすために活動されている、認定NPO法人キッズアートプロジェクトの理事長でもある渡邊嘉行さん。

以上となります。

本日はよろしくお願いいたします。

続きまして、行政からの出席者を紹介いたします。

福田紀彦川崎市長でございます。

市長：よろしくお願いいたします。

司会：齋藤正孝宮前区長でございます。

それでは、開会に当たりまして、福田市長からご挨拶申し上げます。

福田市長、お願いいたします。

<市長挨拶>

市長：皆さん、改めまして、おはようございます。

第76回の車座集会ということで、もうこんなになったかと思うんですけども、でもテーマでアートが上がったことは、恐らく自分の中の記憶では初めてじゃないかなというふうに思います。

とてもうれしく思っているんですけども、昨年市制100周年ということで、その象徴的な事業が緑化フェアというものをやらせてもらいました。そこのタイトルが「Green For All KAWASAKI」と。緑でつなげる、みんながつながるということで、緑を介して、だんだんみんながつながっていくというふうなことをこれからどうやってつくっていくかなということをタイトルにしたわけですけども、実は、これはあまり言っていないんですけど、ちょっとパクリみたいなのがありまして、「Green For All」は、どこから発想、着想がきたかという、実は日本財団さんがスポーツ・フォー・オールという取組をやっていて、全ての人たちにスポーツをしてもらいたいし、楽しんでもらいたいみたいな、そういうようなプロジェクトをやっておられて、僕はスポーツ・フォー・オールと聞いた瞬間に、物すごくみんなを巻き込むインクルーシブな言葉だなというふうに思ったんですね。

今度の緑化フェアも、そして川崎でもっと伸ばしたいところは、グリーンとアートだと思って、アート・フォー・オールかわさきでGreen For All KAWASAKIと、この2つの分野については、もう多くの人たちを巻き込んで、そういう世界観を川崎でつくっていきたいなというふうな思いがあって、アート・フォー・オールかわさきもいろんな、ことラーの皆さんとか、そんな取組を今、行っています。

ですから、こういう形で、宮前区で、アートで人をつなげていこうというふうなことを議論するという場を設けていただいたことにとても感謝をしています。そして楽しみで、ちょっと今日はわくわくするなというふうに思っています。

午前中、本当に貴重な時間を皆さんにいただいたことに感謝したいと思いますし、先ほど司会のほうからありましたけれども、地域デザイン会議で、もう既に議論を始めていただいているということなので、これから今日出てくる取組というのが、もっと多くの人たちを巻き込んで、宮前区からアートでつながる世界を発信できるような取組につながっていくということを、ぜひ期待したいなというふうに思っております。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

<アートに関する区の実践や地域デザイン会議の議論を共有>

司会：市長、ありがとうございました。

それでは、早速議論に入りたいと思います。初めに、アートに関する区の実践等について、企画課の小西からご説明いたします。

企画課：宮前区役所企画課の小西と申します。私のほうからアートに関する区の実践を地域デザイン会議の議論の共有をさせていただきたいと思います。

まず初めに、区の現状というところでして、こちらの文筆家・芸術家・芸能家の数というのが、実は、総務省の統計局が実施している就業構造基本調査というのがございまして、この中で今回アートというところでは文筆家の方とかは入らないかもしれないんですけど、このカテゴリーで見ますと、23区は入っていないんですけど、政令市、行政区全部の中で、2010年度には3,480人、上位から3番目ですね。2015年には3,570人ということで、上位からこちらも3番目。2020年については中原区、高津区に抜かれてしまったんですけど、4,060人ということで、徐々に増えておりまして、やっぱり政令市の中ではクリエイティブな活動をしている人が多い傾向と。これは田園都市線沿いに住まわれている方が多いので、東京に通われている方でこういう方が多いのかなというところかと思います。

続きまして、またこちらも区の現状なんですけれども、アートを活動する場所とか発表する場所というところなんですけれども、先ほども話したように、アート・フォー・オールかわさきというホームページがございまして、そちらでアート等の活動をする発表の場というところが載っているんですけど、宮前区だけで、代表的な活動場所がちょっとないというところがございまして、市民館の区民ギャラリーとかはあるんですけど、なかなかこういった場所がないというところは、ひとつ課題になっているところがあるので、こういったところを今後増やしていけたらなというところも思っております。

こうした課題を受けて、区の実践ということで、宮前区のソーシャルデザインセンター、みやまえBASEというものがございまして、そちらで意見交換しているところの中で、やっぱり個人で美術作品を発表する場所が欲しいというご意見があった中で、これをちょっとアイデアを形にしてみようという動きが去年ございまして、今ちょっと使えなくなってしまったんですけど、鷺沼駅前のシェアオフィスがございまして、こちらの2階をアートを展示する場所にしたらどうだろうというところを、こちらのシェアオフィスの方にもご理解いただいて、発表の場としたというところで、こちらがスライド6のところの、さぎ沼アート展というところ、これは昨年の6月27日から7月3日まで開催しまして、今日お越しの安藤さんとか、Keeppyさんにもご協力いただきながら、それぞれの特技を生かした作品展示を行いまして、期間延べ300人の方にご来場いただきました。

さらに、本日お越しいただいている京森さんにもご協力いただきまして、宮前市民広場、そちらがございまして、こちらのベンチが非常に老朽化しておりました。こちらを市制100周年を記念して、昨年8月にリニューアルしようと。ただリニューアルするだけではなくて、地元アーティストの京森さんにご協力いただいて、地元の子供たちも協力いただきながら、このベンチを作ったということで、非常にカラフルなベンチですので、もし帰り、お時間があればぜひ見ていただければと思うんですけど、すごい広場が華やかになりました。アートの力を感じさせていただきました。こういった実践も昨年度、実施させていただいたところがございます。

そして、これ、区民と協働の実践というところでして、宮前区市民提案型総合情報発信事業という提案型事業をやっております、本日お越しの安藤さんに今日は展示していただいております、今、宮前区役所の中でも展示をちょうどしているところがございますけれども、区民全員アーティスト宣言というところでつながる美術館というのをやったらどうだろうというところで、こちらの内容については、後ほど安藤さんのほうからも詳細を説明させていただきますので、ちょっと割愛させていただきます。

そして、区で先ほど市長からもありました地域デザイン会議、5月26日に開催させていただきました。本日お越しいただいている皆様の方にも一部参加していただいておりますけれども、その中でも改めて意見交換を3つしていただいた中で、アートの魅力、アートの可能性、アートを展示する場所の可能性という議論をさせていただきました。簡単にご紹介させていただきます。

スライド10になります。

まず意見交換①の「アートの魅力・すばらしさ」でございますけれども、アートには正解がない、答えがないもの、コミュニケーションのきっかけにもなることができ、心の豊かさにもつながるというご意見ですとか、人前で話すことが苦手な子供でも、アートを感じて自分の思いを表現することができたという話ですとか、アートの取組はまちを元気にする力を持っている。また、アートは、老若男女を問わずみんなが楽しめるきっかけになるもの、あと、アートは多様性そのものだし、様々な可能性を秘めているというような、ほかにもいろいろご意見がありましたけれども、主にこういったご意見が意見交換をされました。

意見交換②では、「アートの可能性」ということで、アート×〇〇、先ほど様々な可能性があるというところでしたので、アート×〇〇でいろんな可能性が広がるかなというところで意見交換して、本当に皆さん、いろんな意見をいただきました。その中では、アート×公園ですとか、アート×お寺、アート×ケア、アート×観光、こういったアイデアが出されました。これも後ほど意見交換の前に、簡単にご説明させていただきます。

意見交換③では、「アートを展示する場所の可能性」ということで、階段など使われていないスペースを有効活用したらどうかとか、やはり継続的に実施するためには、コストをかけないで既存のものを生かすという発想が大事だということ、まずは、アートは「展示したい人」と「展示に協力してくれる場所」をマッチングする仕組みづくりが必要ではないかというところで、これは本日の意見交換②のところにつながっておりますけれども、こういった意見交換がされましたということで、最初の情報のインプットとしまして、私のほうからは以上になります。

司会：区内でアートに関連した様々な取組を実施されている安藤さんから、今年度の宮前区市民提案型総合情報発信事業としても採択された、宮前区役所を期間限定の美術館とする取組等についてご説明させていただきます。

安藤さん：よろしくお願いいたします。始めていきます。

宮前区役所つながる美術館のご説明をいたします。

今年度から市民提案型総合情報発信事業として採用されました宮前区役所との共同事業となります。つながる美術館のコンセプトから様々な実施企画の説明、最後に現時点で生まれているつながりについてお伝えさせていただきます。

まずは、私たちアースリングプロジェクトの紹介となります。

私が3年半前から立ち上げたプロジェクトになっておりまして、アースリングはちょっと聞き慣れない言葉かもしれないんですけども、地球人という意味でして、国籍、宗教、性別も障害あるなしにかかわらずつながれる、この言葉を使ってクリエイティブの力で地域と世界をつなぎ、より多くの方のウェルビーイングを育み、新しい競争の形を社会に広げていきます。イラストレーターやグラフィックデザイン、映像クリエイター、広告代理店のクリエイティブのメンバーが集い、未来を担う子供たちにバトンを渡すために活動しております。

私たちの取組の一環として、今回宮前区役所つながる美術館をスタートしました。8月から10月末までの3か月もの間、宮前区役所全体を美術館にしてみようという思い切った企画となっています。宮前区をもっと好きになり、まちづくりに関わるきっかけをつくる、そして未来を担う子供たちの想像力を育むこと

を目的としています。

そのために宮前区に暮らす人、働く人、関わる全ての人は、よりよい明日をつくるアーティストだと考えます。そして、区役所をアーティストである皆さんと行政が協力しながら豊かな未来を描き、表現する生きた美術館に見立てます。この思いを形にするため、区役所を活用し、皆さんのアート作品の展示はもちろん、アートを通じた交流の場をつくる企画を次々と発信しています。

まずは、この企画の顔となるロゴマークを全国募集しまして、137点もの作品が集まりました。それらをロビーに全て展示して、区民投票400票以上の中から30点に絞り、ここにもいらっしゃる京森さんや、前回のデザイン会議に来てくださった山田佳一郎さん、副区長、そして国立アトリサーチセンターの主任研究員の稲庭彩和子先生にもお越しいただき、豪華な審査会を行いました。

グランプリの方が決定し、このようにMの文字にも宮前の坂にも見える、つながった愛らしいロゴマークが誕生しました。川崎の色が宮前でつながるイベントになるようにという意味を込めて、赤、緑、青の川崎カラーを1本につなげた色を、後で私がつけさせていただきました。

こちらはメインの企画になりまして、つながるみんなのアート展という名前で、プロアマ問わず110点以上の作品が川崎全域から集まりました。こちらにもいらっしゃるエリーズカフェの小林さんの下で活動されている大学生の方がワークショップをこのアート展のために自主的に開いてくださったり、聖マリアンナの院内学級の病気を抱えたお子さんたちの作品もそろいました。

椅子の立体アートは女子美術大学と武蔵野美術大学の生徒さんのコラボ企画で、今は2脚ですが、少しずつ増えていく予定になっています。4階にも展示しておりまして、宮前区の消防署長に私からお願いいたしまして、見応えのある巨大な作品展示実現となりました。老若男女障害あるなしにかかわらず、国籍も関係なく様々なアートを集めることができました。

作品をただ展示するだけだと数枚見て帰ってしまいましたが、スタンプラリーのシステムを導入し、スタンプを集めて回りながら絵も鑑賞できるようにいたしました。

スタンプを集めるとメッセージが完成します。集めると商品として、コミュニケーション力をつけたり想像力を育めるアートカードのセットやメロコスグッズがもらえます。アートカードはこちらにいらっしゃる朝倉さんやアレンさんにもご協力をいただきました。

続いて、アースリングスプロジェクトのメンバーでもいてくださっているNHKの子供番組、「シャキーン」や「浦沢直樹の漫勉neo」「BAEBAE美術館」など、数多くの企画演出をされているポジティブクリエイターの倉本美津留さんにファシリテーターをしていただき、一緒に開発した宇宙人レシピという、世界で1つのオリジナルキャラクターづくりワークショップを行いました。最後はみんなで歌って、初めて会った人同士なのに絆を感じたという方もいらっしゃるほど、ピースフルな企画となりました。

続いて、こちらにもいらっしゃる市民文化振興室の山本さんの力をお借りして、市民ミュージアムと浮世絵ギャラリーの展示が実現できました。区役所のレストランがなくなって暗い状態が続いていたデッドスペースの期間限定の有効活用として、つながる美術館に花を添えていただきました。個人的にはこの実現には胸が熱くなり大変感動しています。ミュージアムさんが設置してくださった塗り絵も大人が熱心に楽しんでいて、すぐに用意していた紙がなくなります。また同じ空間に後ほど説明するドミノも置いてあり、子供が遊べるスペースとなっています。

では、ドミノの件です。こちらは女子美術大学と武蔵野美術大学の学生さんらの共同プロジェクトの実現です。宮前区で知り合った2人の生徒さんが企画してくれました。ドミノを倒すとつながるので、これを選んだとのこと。1つ1つ、木をカットして、ヤスリをかけ、丁寧に作られたドミノに当日集まった親子の参加者が思い思いに絵を描いています。学生が撮影編集し、ユーチューブにアップする予定です。2つの優秀な大学のコラボは学生らにとっても新たな刺激になっているようでした。

続いて、今日も来られているアースリングスプロジェクトのメンバーの1人、テレビプロデューサーの宮

本さん、企画パーソナリティのみやまえアートラジオ、こちらも区役所や市民館、そして岡本太郎美術館で公開ラジオ収録をして、朝倉さんや和泉さんにゲスト出演していただき、次回はアレンさんの出演も決まっています。目で見ただけじゃなく、耳でも楽しめる企画となっており、宮本さんの周りのプロの音楽家の方が本気のジングル音楽をつくってくださって、聞いたときは鳥肌が立つほどクオリティが高くて驚きでした。ぜひ聞いていただきたいと思います。

最後に2階に設置しているつながるまるアートというシールと、文章ゾーンの説明とつながりについてです。まるアートに関しては、参加者が誰もがなじみのある懐かしい丸いシールを1枚だけつながるように貼るアートで、知らない人同士が1枚の作品を作っているものです。中にはつながりたくない、遠くにシールを貼る方もいますが、周りが放っておかないようで、そこにもつなげるように、誰かが貼るという、社会は1人で生きているように感じてしまう人もいるけれども、誰かが必ず見てくれているんだということでしょうか。

また、10月まで2か月ほどありますが、様々なメディアとつながり、横浜FMや神奈川新聞、先日はNHKの首都圏ネットワーク、おでかけしゅと犬くんコーナーでも生放送にて取材いただきました。協力してくださった方も100人以上にはなり、そこでつながった方同士でも新たな企画が生まれていると聞きます。

聖マリアンナ院内学級の子供たちとのつながりで、病気と闘う子供たちのことを知ってもらい、応援する人を増やすきっかけにもなり、障害のある方も平等に関わっていただき、岡本太郎美術館や市民ミュージアム、浮世絵ギャラリーなどの川崎市が誇る文化施設とのコラボレーションも実現、消防署とのつながり、この事業の実現を共に作り上げてくださっている宮前区の企画課の鈴木さん、小西さん、寺田さん、玉井課長や市民文化振興室の山本さん、青木さん、太田さんにも感謝の気持ちでいっぱいです。

ご清聴ありがとうございました。

司会：安藤さん、ありがとうございました。

<アートの可能性（アート×〇〇）のアイデア出し>

司会：続きまして、アートの可能性を広げていくための意見交換に移りたいと思いますが、その前に5月に開催された宮前区地域デザイン会議でアートの可能性を引き出すため、様々な「アート×〇〇」に関するアイデアが出されました。その内容について、企画課の小西から簡単に説明いたします。

企画課長：先ほどちょっと簡単に説明させていただきましたけれども、「アート×〇〇」というところで、このアートに掛け合わせることで、宮前区としては地域の魅力発信とか地域課題解決にも資するようなものとして、どのような組合せが効果的かというのを皆様からこの後ご意見いただきたいなと思っております。

地域デザイン会議で出た意見としまして、例えば、アート×公園ということで、公園をアートで飾り、対話型鑑賞をしたりとか、あとアート×お寺、そもそもお寺はもう文化財そのものではないかというところで、これはまた可能性があるんじゃないかというご意見、アート×ケアということで、これは安藤さんのコメントでしたけれども、やっぱり聖マリアンナ院内学級のワークショップで病気を抱えた子供たちが絵を描くことで、楽しさを実感できたという、力を与えてくれたという可能性を言っていました。

あと、アート×防災ということで、防災頭巾にアートをしてはどうかとか、あるいは避難所の段ボールの間仕切りに、例えば子供たちのキャンパスにして、そうするとストレス軽減につながるんじゃないかとか、あるいは防災キャンプにアートを絡めてはどうかと、そういったご意見もいただきました。

あとは、アート×スイーツというところでは、アートアイシングクッキーというところで、実際クッキーとかに絵を描いていくと、そういったことを販売してはどうかとか。

あとは、アート×古い場所ということで、古いものを後世にどのように残していくか、未来につなぐメ

ッセージというところで、京森さんからいただいたかと思いますが、そういったご意見。

あとは、アート×祭りというところで、こちら祭りというのは伝統そのものなんですけれども、そちらを掛け合わせることで地域の発展とか価値の創出につながるのではないかと。

あとは、アート×遊休不動産ところで、空きスペースを有効活用してギャラリー利用とか、アトリエ化したら面白いんじゃないかと。

あとは、アート×まちということで、まちの中にアートを感じられる場所の演出。

アート×観光というところで、区内のアートな場所をこつラーの人たちのサポートを得て巡るツアーを実施したらどうかと。

あとは、アート×朗読会ということで、朗読する物語と関係する絵を展示。

あとは、アート×森ですね。伐採した木々の廃材をアートに有効活用する竹細工など、こちらもあるんじゃないかと。

あとは、アート×花、廃棄する花をアートに有効活用と、こういった様々な意見が出ておりました。

「アート×〇〇」、コラボすることができるものというのが一旦出たんですけれども、これをさらに本日深掘りすることで、こういった地域魅力の発信とか課題解決につなげられるようなアイデアをぜひよろしくお願いいたします。

以上です。

司会：説明ありがとうございます。

<意見交換>

司会：それでは、ここからは「アートの可能性」などについて、市長と皆様で意見交換し、多様なアイデアをいただきたいと思います。

ここからの進行は市長をお願いいたします。それでは、市長、よろしくお願いいたします。

市長：ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

今、聞いただけでも地域デザイン会議で相当なアイデアが出ているんですね。とてもこれ、1人の人で出てくるアイデアじゃなくて、みんなの得意技だとか、関心のあることをこうやって出していくと、アート×何々というのが、こんなに生まれるんだなということを何か、ちょっとわーおという感じですけど、さっき安藤さんが倉本さんの紹介をされたときに、ポジティブクリエイターと言っていました。初めて聞く肩書だなと思ったんですけど、ポジティブクリエイターは何かすごいいい名前ですね。倉本さんが名のつておられるんですか。

いや、何かポジティブにクリエイティブしていくって、何これと思いますが、まさにこれ今日の、まずアート×何々というのは、まさにポジティブに考えてアイデアをちょっとみんなで出し合っていこうということを、最初の45分間ぐらいですかね。やっていきたいというふうに思っていて、みんなでアート×何々というのを地域デザイン会議に出席された方も、改めてどう思っているんだよということを言っていたきたいですし、今回初参加していただいている方もご自身の経験、立場みたいなところから思いを言っていたければありがたいなというふうに思っています。

それでは、まずいろんな方からお話を聞きたいんですけど、K e p p yさんが作品の完成に向けて作業もありますので、K e p p yさんからでもいいですかね。

武藤さん：皆様、初めまして、K e p p yと言います。本名は武藤慧子です。

そうですね。ちょっと上のところでライブペイントをキットパスを使ってやらせていただく関係で最初に

意見を言わせていただくんですけれども、とても広くて難しいんですけれども、今ふと、アート×何々の先には、何があるのかなというのをちょっと考えていたんですね。

何か花を見てうれしくなったり、ポジティブな気持ちになったりとか、スイーツ食べてうれしい気持ち、楽しい気持ちとか、人とつながってうれしいとか、でも必ずアートは、自分で作って自分の家の中で終わったら、それはもう何か作品になり得ない、何ていうか、自分の中のものじゃないですか。

でも、それを外に出すことで、人に見てもらったりすることで、ほかの人に違う感情だったりとかをもたらすというようなことがあるのかなと思って、ちょっとまとまらないんですけど、人の気持ちとか、その人が先にいるということが、やっぱりちょっと考えたら、いろいろな意見が出てくるのかなと。その先にいる人、子どもたちだったりとか、限定しなくてもいいと思います。

市長：なるほど、ありがとうございます。やっぱり自分だけでその作品を終わらせるのではなくて、他者と関わることによって、いろんな感情が生まれてくるし。

武藤さん：そうですね。生まれてきて、まちへの愛着だったりとか、郷土愛とか、そういうのも全部そういうところから生まれるのかなというふうにちょっと思いましたと、意見だけ言わせて……。

市長：そういう意味では非常にいいコミュニケーションツールにもなるというような形なわけですね。すごい何か、もう既に書かれている絵が、元気が出てきそうな、何か語りたくなりますよね。ありがとうございます。

武藤さん：ちょっと1時間ぐらいで完成できるように頑張りますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

市長：ありがとうございます。

ちょっと人を元気にさせるという意味では、渡邊先生にコメントいただきたいと思うんですけれども、さっき聖マリさんの取組もありましたけど、渡邊先生のところも病院内で取り組まれているという話を聞きましたけれども、ちょっとご紹介いただいてもよろしいでしょうか。

渡邊さん：ありがとうございます。キッズアートプロジェクトというのを立ち上げさせていただいています。

さっきのポジティブクリエイトはすごい表現だと思っていて、自分も入院している子供たちに何かをしてあげたいんじゃないかと、それだと何ていうんですか、大人目線というか、偉い者目線じゃないですか。じゃなくて、入院している子供たちがお得になるようにひっくり返せないかなと思って始めたのが最初のきっかけで、でも子供たちも、さっきもいろんな関わりが出てくるんですけど、あえて小児科の教授の先生の白衣を朝一番で盗んできて、みんなでいたずら書きをして、そっと教授に返したんですよ。教授はちゃんと着てくれたんですよ。

もう子供たちは悲しい思いだったのが一気にポジティブになって、自分にとって物すごいハードルの高かった教授に対して、声かけやすい。おまえの白衣を俺がいたずらしてやったんだぜぐらいの勢いになる。ここでコミュニケーションが生まれるのはすごい大事だなと。

何がアートは大事なのかと、さっきお話、Keepyさんもされていたんですけど、多分、アートプラス何かじゃなくて、何かプラスアートがポジティブになっていくのかなと、何となくちょっと思いました。

市長：なるほど、なるほど。アート×何よりも、一応最後のところですね。あるものにアートを足すこと

によって……。

渡邊さん：ポジティブになっていく。

市長：ポジティブになるということですね。

渡邊さん：アートを中心に考えるから、どうしても専門性のあるものだったり、みんながハードルが上がってしまうんですけど、でも、この生活の中にアートがあるからポジティブに持っていけるわけじゃないですか。と考えると、これをわざとひっくり返して、いろんなものに対してアートがそっとサポートに入ったり、支援に入るからポジティブになるのかなと、さっきお話を聞いていてちょっと思いました。

市長：面白いですね。

渡邊さん：その辺は何か子供たちの入院の活動も何となく、そういう方向に向かっているかと、さっきちょっと思いました。

市長：お医者さんの白衣にいたずらも、子供たちがハッピーになっているから、これもすごいアートの世界ということですね。

渡邊さん：そうですね。めちゃくちゃよろんでいましたね。やってはいけないことをやれるって一番楽しいじゃないですか。

市長：ポジティブですね。

小林さん、カフェで、いろんなワークショップをやっていただいているとか。何か学生さんたちとかを巻き込んでいらしやるというような話がさっきご紹介があったような気がするんですけど、ちょっとコメントいただいていいですか。ポジティブの視点でも何でもいいんですけど。

小林さん：ありがとうございます。私は、エリーズカフェというのをやっていまして、そこで障害のある方が通う場所、カフェの隣に公園があるんですけど、その公園の管理もさせていただいています。その公園を会場にして、子ども食堂というのを開催しているんですけども、そこにボランティアに来てくれる大学生が、今回のこのつながる美術館の企画を知って、子ども食堂のときに来た子供たちと一緒に作品を書いて応募しようというのをさせていただきました。

そのときは、このアート×公園もそうなんですけど、公園にいろんな子供たち、学生とか、障害のある方とかが集まって、みんなで遊んで過ごすというのが自分の子ども食堂なんですけど、やっぱりその中でも何かやること、楽しみが1つあると、余計盛り上がって楽しいんでいるなという印象を受けているんですけど、今回のアートも子供たちがこういうのがあるよという、もうみんなでいろんな絵を描いて、それを見せ合ったりとか、知らない子同士とかでも絵を描いて見せ合うことで、何か会話が生まれたりとか、やり取りが生まれたりとか、そういう楽しいイベントになりました。

市長：ありがとうございます。子ども食堂という場から、公園とアートのエッセンスを入れることによって、みんなが新しい価値を生み出しているというような感じがしますね。

いや、いいですね。ちょっと、どなたかコメントしたい方、どなたでも結構ですけど、何か和泉さん、う

んうんうなずいていたから、和泉さん、行ってみましょうか。

和泉さん：ありがとうございます。何でも。

市長：何でもいいです。アートの可能性。

和泉さん：アートの可能性ですね。

何から行こうかな。僕らは、京森さんと一緒に、京森さんは相変わらずジョン・レノンに似ているなと思って。

京森さん：ありがとうございます。

和泉さん：京森さんと出会ったのが高津区にある、おふろ荘というところですよ。

廃業した銭湯を再生させるというか、そこをマンションに建て替えるまでの間、地域の皆さんに使ってもらいたいという地主の意向があって、それで男湯と女湯があったんで、女湯を京森さんたちがアトリエとして使って、男湯を地域の小学校向けにアート図書館みたいな感じで展開したことがあったんですね。1年限定のプログラムだったんですけども、ちょっと延長して1年半ぐらいやったということがありました。

ちょうどそこは何か岡本太郎さんのお母さんの岡本かの子さんの実家の近くで、人間国宝の第1号ですね、濱田庄司さんとか、あとそのつながりで北大路魯山人とか、昔はそういう方々が多くいらっしゃった場所、大山街道ですね。ただ、今はもう246の抜け道になっていて、あまりそういう何かアートとかカルチャーの匂いがしないという状態になっていて、そういったものを回顧主義じゃないけど、もう少し何か、やっぱりそういうリスペクトを表現できるまちにしたいよねということで、京森さんたちのアートのアトリエ、延べ10人ぐらい使っていましたか。京森さんとか。

京森さん：はい。

和泉さん：そうですね。というアーティストさんたちの活動の場所と、アート図書館みたいな感じにして、ふだんは見えないような岡本太郎さんの画集みたいな、1冊5万ぐらいするようなやつを置いたりして、小学生が学校帰りに見られるとか。何かそんなプログラムとかをやっていると、地域のアーティストさんのふだん見られない真剣な作品づくりの様子が、地域の人たちが見られたりとか、何かどうやって作品が作られているかみたいなことがすごい見えていたりして、何だろうな、地域の子たちが、実は僕の長男も、今もう22歳なんですけど、高校のときに、アシスタントにちょっとお世話になっていて、彼もやっぱりそれに行く前と行く後だと、そういう作品づくりのひたむきさみたいなものが彼の中にインストールされて、大分変わって帰ってきたんですけど、そうやって地域の人たちがアーティストたちの、通常は、美術館はちょっとクローズされた、ジャケットを着ていくみたいなものがいきなり日常に落ちてくると、何かその作品の過程まで、作る過程まで見えちゃうと、すごくそこに対しての親近感とか、アートというものが急に日常に落ちてきて、さっきもおっしゃっていましたが、日常化していくということによって、何かアート思考とかクリエイティブマインドみたいなものがどんどん植え付けられていくみたいな、何かそういう意味で1年半はとてもよかったなと思っています、というのは何か大丈夫ですか。

市長：いや、いいですね。ちょっと今、懐かしかったですね。高津湯のあのプロジェクト、あれ8年ぐらい前でしたっけ。大分時間がたってですけど、あればむちゃくちゃ面白かったですね。

そのことで、京森さんがちょっとお久しぶりですけれども、京森さんが、つながる宮前のあれにも関わっていただいているということにちょっと今日はすごい感動しているんですけど、今のプロジェクトのことで何かちょっと思いをお話いただけますでしょうか。

京森さん：僕は美術家という立場からちょっと考えていることをお話しさせていただきたいと思うんですけど、まずアートをしている人とか美術家をしている人たちは、結構多くの方が生きづらさとか、社会の中だったり、小さいときから吐き出したいけどとか、なじめないこととか、僕自身としてもそういった経験があった中で手をただ動かすと休まる時間だとか、そういう開放的な作用というよりは、自分の中で消化し切れないものを消化する、個人的なものもすごくあるのかなと思っていて。

もう一点は、鑑賞をする人とか、社会で生きている人たちが、そのアートとの向き合い方とか、どういうことが豊かなんだろうと考えたときに、何かあそこにドミノのやつがあって、僕はすごくあれが気になっていて、すごくいいなと思っていたんですけど、何か無機質な社会の中でこういうちょっと異彩を放っているようなものたちがあることで、そこに1回視点が入って行って、視覚でそれを見て、これはどういうことで作ったんだろうとか、ドミノはこれ何か、こちら辺は倒れているんだとか、1個1個絵が描いてあって国旗みたいなものも入っているんだとかと、何か勝手に視覚から入ったものが脳の中でいろんなことがめぐりながら、それをしているだけで、すごく豊かな時間だなというふうに考えていて、まちの中だったりとか、いろんな場所でそういったアートというか、皆さんが作る創造物みたいなものが視覚的に入ってくるということは、すごく豊かだなというふうに僕は考えています。

あと、ベンチをあそこで作らせていただいたときの経験として話したいなということがあるんですけど、100人の子供たちと、この地域の宮前区の小学校の方をそれぞれ有志で集めてきて、100人の子たちとベンチを装飾するというか、スタンプしたり、自由な形を作って飾るというか、塗っていくというようなワークショップだったんですけど、何かどうしても教育とか、いろんなことの画一性は、答えがやはりあったり、回答があって、それに至って正解を出していくようなことは、すごく昔から教育の場所とか、いろんなところで多いなと思っていて、アートのよさというかがあって、答えがなかったり決まっていなかったことに対してどう向き合えるとか、逆に答えなんてないんだよと気づける瞬間みたいなことは、その人の中で凝り固まっていたことが1個壊れる、すごく大きな瞬間だなと思っていて、現にベンチをやっているときも、やっぱり本人の中ではこうしたいとか、絶対これじゃなきゃいけないみたいなこととか多分考えているんですけど、でもそうじゃないやり方とかもいっぱい、みんなの中で見ていく中で、それが崩れていくというか、別にこれでもいいかみたいなことをやっている瞬間とかを見ると、多分こういう子たちの中でもそういった、ちょっとずつそういうことを経験することで、それが壊れて解放されて、何か新しい視点が生まれていくということが少しでも増えるといいなというふうに僕は感じていたりします。

市長：ありがとうございます。何か参加してプロジェクトで、例えば作品を作る過程の中から、自分なりの答えを見いだしていくみたいな、そういうものがあるんだというようなお話ですよね。画一的な、均一な世界観ではなくて、自分なりの答えの出し方でいくという、そのプロセスも大事なんじゃないかというようなお話だったと思います。

大高さんが隣で物すごく共鳴し合うようにうなずいていたので、お隣、大高さんにマイクを回したいと思っています。

大高さん：ふだん障害者のアート活動をサポートしているんですけど、皆さん何か言われたことをやるという、例えば、ボールペンの組立てとか、何かそういった作業を、これをやってくださいという指示の下でやるということをやっとやってきた人たちが多くて、そういう中で、うちはアートだけをやっているんですけ

ど、何か描いたりとか、塗ったりとかして、表現したものがそこに出来上がると、私はこんな表現をする人ですというのを相手に伝えることができる。こういう障害を持っています、ではなくて、こんな表現をする人ですというのを、家族とか、絵を見た人たちとかに伝えることができるすばらしいツールというか、アートはそういう力を持っているなというのをすごく感じています。

この中で言うと、宮前区は公園が多いなと思っていて、文化施設というより、公園が多いので、公園の中でいろんな、障害の人に限らず、一般の方も皆さん表現できるような何かイベント、例えば布に絵を印刷して、木の枝とかに、公園中飾ってみたりとか、何かこう触れたら光るようなものを、オブジェみたいなのを置いてみたり、あと思ったのは、防災というのがすごい気になっていて、例えばボトル、百均とかで売っている透明のボトルとかに、みんなが、子供とかが絵を描いて、その中に防災グッズみたいな包帯とか、ようかんとか、そういうのをに入れて持ち帰る、非常のときにもすごくとても便利で役立ったりとか、灯籠というか、懐中電灯を下から照らして、ペットボトルに絵を描いて、実際に電気が使えなくなったときとかに、スタンドみたいな感じで使えたりとか、そういうアート×防災というのも面白いなと思って、そういう制作を公園の中でできたら、何かすてきなんじゃないかなと思います。

市長：いや、いいですね。そんな公園がいろいろあって、身近な公園でそんなことができていたりしたら、稲木さん、あれですね。まちの価値がすごい高まって、そこに住みたい、そういうエリアに住みたいという人たちが増えてきますよね。

稲木さん：はい、そう思います。私、不動産業者に勤めているんですけども、あと、ご存じかどうかなんですけど、フェイスブックでふらっと宮前区というものの管理人をさせていただいているんですけども、まず地方のほうからとか、あと例えば上京してきたりとかしたときに、初めてお家を探すときは不動産屋に大体来ると思うんですね。そうしたときに、うちのスタッフにいつも言っているのが、要は初めて来た方に宮前区のいいところを紹介できる、3つぐらいは伝えられるようにしようよという話で、やっぱり今回、すみません、初めてなんですけど、アートのまちというところは、自分は考えていなかったキーワードだったので、次回うちのスタッフに案内するときは、宮前区はアートのまちですよというのを付け加えたいなと思っています。

実際のところ、遊休不動産とか、今このカテゴリーをちょっと見させていただいたときに、やっぱり宮前区は結構住居地域的にも、結構低層の要は2階建ての静かなエリアが多い。住宅地というメインがあって、例えば溝の口とか、そういう商業地域だったりとかというところと違って、やっぱり静かなエリアですけども、そこで、例えば戸建ての古民家がずっと空いちゃっていて、その場所でギャラリーとか造ったりしたらいいかなといっても、なかなか近隣の状況だったりとか、あと駐車場の問題だったりとか、やっぱり周りからの苦情だったりとか、あと建物も、そもそも住居でやっていますから、そういうものに変更するという、用途変更しなくちゃいけなかったりとかと、そういういろんなものが絡んでくるというところで、今、自分が見ていたときに、田園都市線がちょうど宮前区のだ真ん中辺りを走っていて、横には、バス路線がめっちゃくちゃあって、私も鷺沼の今、店舗で、鷺沼駅前に乗っていつちゃっているんですけども、実際のところ、やっぱり見ると、バスを待っている方がめっちゃくちゃ長く待っていたり、多分その逆で、朝は駅に向かうバスを待つ人たちが多いバス停となると、ちょっとそこは公共の力も必要かもしれないですけども、今ふと思ったのが、ポジティブにと考えるのであれば、会社に行くまでの通勤路、30分、1時間、下手すれば1時間半かけていくところ、ポジティブになるアートが、バス停だったり、その場所にあることで、目にして、よし頑張ろうという気持ちにもなるんじゃないかなというふうに、ふと思ったので、ちょっとこの場を借りて、ふとしたアイデアですけども、伝えさせていただきました。

市長：面白いですね。やっぱりいろんな仕事をされている方の視点というのがあると、こういうことになるんだなということを思いました。

公園の話がさっきからちょっと出ていますので、武久さん、公園をまちづくりの中でどう生かしていくかみたいな、アートの可能性という意味での公園だとか道路だとかというふうなのを、どう考えますか。

武久さん：道路公園センターの武久と申します。

実は今日、皆さん、ほとんど初対面の方ばかりなので、道路公園センターの事業とか、私なりの紹介をさせていただきたいと思いますが、まず道路公園センターは、道路、河川、公園の維持管理を中心とした業務を行っています。また道路の占用とか、公園の占用の許認可も行っているというような事業所になってございます。

私なんですけど、実は昨年度まで、先ほど市長のお話にあったとおり、緑化フェアのほうの上のほうに携わっていました。その中で、ちょっと公園の使い方とか新しい使い方とか、そういうものをいろいろ事業として取り組んできました。例えば公園では夜の使い方、例えば木にイルミネーションですかね、をつけて、そこにキッチンカーを置いたりして、あと音楽をちょっと加えて、夜をどういうふうに楽しく過ごしていただけるかとか、そういう取組をしてきたりとか。

あとアートの点でいいますと、例えば世界的に有名な押し花作家の方が、自分の作品を展示していただいて、それで、その人が実際に体験教室をやっていただくとか。あと会場づくりの中で言えば、例えば森の、これは等々力会場なんですけど、21世紀の森というちょっとした森に透明の傘を、ちょっと色のついた傘をいっぱい飾って、そこに大きな額を作って、ちょっとしたキャンパスみたくするとか、そういういろいろな取組をしてきました。やはり、皆さんも来ていただいて、すごく喜んでいただいたというような手応えも感じております。

今回そういうアート×公園というところで、ぜひ我々も公園を活用して、こういうアートの魅力というものを展開していただくのはすごく、公園の活用にもつながるかと思っております。

また、公園は、実は町内会の方が中心になって愛護会とか、管理植木会の方が維持管理、清掃とか、草むしりというのをやっていただいております。実はそういう方と、例えばこのアートに携わっている方がこういうふうに何かコミュニケーションを取るとかいて、そこで新しい何かそういうつながりみたいなものが生まれると、例えばお互い違う分野のことを知れたり、公園はこういうものが知れるんだということで、相乗効果が生まれると思っておりますので、もしそういうアートに関するイベントというものがあれば、我々のほうもぜひその協力をしていきたいというふうに考えています。

なかなか、これも公共的な場所なので、多少ルールみたいながあるので、その辺はちょっと調整をさせていただきたいと思いますが、ぜひそういう何か盛り上げることを、公園を使いたいということであれば、ぜひご協力したいと思っております。

以上でございます。

市長：ありがとうございます。公園も積極的に活用していこうと。今までの、さっきの京森さんの話じゃないですけど、画一的な世界からもう少し面白い使い方とか、表現の仕方というの、公園でできるようにというふうな形になっていけば、もっと面白いかないというふうに思いますね。

それでは、いろんな視点からということで、朝倉さん、カイロプラクティックをされているということで。

朝倉さん：初めまして、朝倉と申します。よろしくお願いします。

私はふだん、カイロプラクティックの治療院をやっているんですけど、メインは東京でやっているんですけども、昨年のちょうど1年前に鷺沼の北口のほうの近くで、2店舗目の、ちょっと新しい形態の治療院のほう

をやらせていただいているんですけども、ふだんは私、慢性痛に関して非常に特化した治療というか、自分自身の研究も含めてなんですけど、慢性痛に対してアプローチしていくんですけども、そうしたときにその慢性痛というのが、何ていうんですか、例えば腰痛なら腰痛とか、肩こりなら肩こりとか、痛みということを見ていくと、結局のところ、もう慢性痛の問題は複雑要因が重なり合い過ぎて、1つの原因を求めることはできなくて、腰が痛いから、例えばヘルニアがあるからヘルニアの問題ですねとか、ぎっくり腰を起こしてもその筋肉の問題がということではなくて、最終的には痛みは感じ方のものなんで、脳がどういうふういろんな情報をインプットして、最終的にそれをどうアウトプットするかという、その表現が痛みなんですね。

だから慢性痛というのはずっと同じ状態で、その人が抱えているこのストーリーというか、記憶の中にあるものがずっとアウトプットし続ける状態なんで、そのサイクルを1回断ち切っていかないと、なかなかその慢性的な疾患とか痛みというのは治らないという状況で、そういうことを心と体のつながりも含めた、ちょっと変わった見方をしているんですけども、そこに私自身がアーティストで絵を描いているということもあって、その中で脳のいかに可塑性という、神経のつながりというのは、一旦構築したものを同じように保つという特徴があったりするんで、物の見方、さっき、何ていうのかな、固定観念とかもそうなんですけれども、人間が凝り固まった状態の中にいると、ずっと同じ状態になっちゃうじゃないですか。そこに違った見方の物が入ってくると、今までの固定観念から違った、こんな見方もありなんだ、子供たちが先ほど作品に関わったときに、自分のこういうふうにやりたいといったときに、これしかないと思い込んでいたことが、こんなやり方もあっていいんだなというところが、アートの中には可能性というのがあって、そういうことも含めて、いかに自分の中に限られてしまった物の捉え方、見方を変化させていくかという意味では、すごくアートというのはいいなというふうに個人的には思っていて、今日の皆さんの話を伺っていく中で、話したいことがたくさんあり過ぎちゃって、ちょっと困っているんですけども。

1つ今、聞いていて思ったのが、僕自身もそうなんですけど、ふだんやっぱり元気にするということが1つテーマだと思うんですね。健康ということを考えてときに。でもこの間、つい先週、ちょっとたまたま意識と体の健康に関わるワークショップとか、セミナーをやらせてもらったんですけども、その中で、ある種、姿勢の状態、要するに体から、何ていうんですかね、ポジションを保つだけで意識が変わってくる、あるいは意識の状態から体を変化させるという、そういうことをやっていった中で、たまたま参加者同士のワークショップをやったときに、同じ目線で、例えば元気な人同士が同じ波長でいる分にはいいんですけども、元気な人と元気じゃない人が一緒にいたときに、やっぱり圧倒されてしまうというか、元気な方が、言葉は悪いですけど、弱い人を食ってしまうというか。

行政とか、福祉とか、政治の世界とか、そういうところは結局みんな強い人たちなんですね。例えば市長さんもそうなんですけども、そういう政治家とか、世の中に出る人は、エネルギーがすごく強い人じゃないと、世の中を当然牽引していけないし、世の中を変えることはできないんですけれども、そうなった中で、やっぱり弱い人たちの立場は、なかなか自分が弱い立場に1回落ちてみないと分からないということがあるんですね。

その自分のエネルギーが下がり切ったときに、同じ目線に初めて立ったときに、またこういう状態で、低い状態でも、お互い安心し合う環境とかエネルギーの波長があるんだなということに、たまたまそのときに気づいて、だから元気であればいいということではなくて、だからアートの中にも、ネガティブなアートも多分あると思うんですね、たくさん。音楽でもポジティブなものがあれば、悲観的に浸る音楽とかもあるように、アートの中でも、非常に暗い絵だったりとか、そういうものを見る中で、悲観的な感傷的に浸ったところに、今の自分の状況はこうなんだ、もっとこうしていこうという、違った、また明日への元気を取り戻すということもあると思うし、だからポジティブだけがいいことではないしということも何か今日聞いていて、改めて思ったんで、そこで市民活動の中にアートということ、そのアートのまちとして考えたときに、

もっともっと身近にアートがあったらいいなと思って、アーティストとくくっちゃうとやっぱりそこも敷居が高くなる、ちょっと何か特殊な人たちというふうになっちゃうんですけれども、まさに今やっているこの市民全員がアーティストって、この市民全員がアーティストという立場に立つと、何やっても大丈夫なんだ、私でもそこに色を入れていいんだというところから、その駅前のちょっとした区画、決められた区画でいいんですけど、そこに何か、誰かが何か色を落としていくとか、道路の何だろう、こういう分からない、何ていうんですか、場というの、敷居とか、そういうところも何か違った決められた公共の色じゃなくて、違った色があっていいといったところには、何かこの区は面白いなみたいな、そういう誰もが何かアーティストになっていいまちなんだなみたいなのが、もっともっと身近になっていくと、非常に何か面白いまちになるんじゃないのかなという、取り留めもない話とか、いっぱい何か話したいことがあり過ぎて、あれなんですけれども、そんなことを今、感じました。

市長：ありがとうございます。物すごい共感を得ていると思います。

確かに、私も政治家の1人ですけど、むちゃくちゃ暗い絵を見ながら、共感して頑張ろうということはありません。むちゃくちゃネガティブなときは、そういうのがありますよね。だから確かにポジティブの話なんですけど、全員が全員、すごくパワフルで元気という状態に、誰も別にそこは望んでいない。その人はその人らしくというふうな世界観を自分なりに参加なり表現なりできたらいいなという、そういうようなお話ですよ。ありがとうございます。

アレンさんいかがでしょう。いいですか、コメントいただいて。

アレンさん：初めまして、アレンと申します。日本に2000年来て、もう在住歴25年、あっという間、人生の半分は日本で過ごしているという自覚です。

川崎市宮前区に来たのが2011年、もう14年ぐらいたって、4年前から仕事絡みで写真というのを取り扱っていますから、4年前からもう仕事の気晴らしで写真を、カメラ持って行って、公園に行って写真を撮り始めていたんですね。そのときに撮った写真を、勇気を出してふらっと宮前区のコミュニティに投稿して、そのときにすてきですねとか、今まで見たことない風景ですとか、こういう角度から見ると、意外ときれい、美しいという声があって、割と皆さんがこういう写真を見たがるなと思って、それが励ましになって、今度は公園だけではなくて、もう宮前区の街自体の風景を積極的に撮ることにしました。

もちろんほかのつながりがあって、イベントに参加することになり、初めて生田緑地のスポーツカルチャー、国際イベントで参加したときにも、宮前区写真ギャラリーというものに、写真のギャラリーを展示したときに、それを見て来た区民の方が、励ましになって、私も久々にほこりをかぶっているカメラで撮って、自分でまちを撮っていこうという声もいただいて、写真という1つのアートを考えると、住んでいる人たちのまちに対する愛着と、あと、まちの発展という可能性を秘めているというふうに思いました。

宮前区の風景写真を1つのみやまえ日和というサイトをつくったときには、今後は可能であれば、このプラットフォームがほかの写真家の自分の作品とか、日常的に撮っている宮前区の風景写真を展示する1つの場、展示の場所になることを夢見て、そういった活動プラス最近、宮前区在住の写真家を紹介するという活動もやっておりますので、どこかで宮前区の風景写真の展示場が1つになって、そこを例えば、今度は川崎市に引っ越ししたいなと、どの区がいいとか、そういった外の人たちを見たときに、宮前区が美しいとか、宮前区は結構緑がいいとか、私の写真とか、ほかの皆さんの写真を見たときに、ここに住もうと思った瞬間は、もうこれはまちの発展につながったと、1つの成果になると思ったので、例えば稲木さんがやっている不動産屋さん、ぜひ私の写真を使って、ここに住もうと検討している皆さんがこの写真を見て、ぜひご検討くださいという、もうこれぜひ使って構わないので、そういうのがまちの発展につながれば、私はいいなと思っておりますので、よろしくお願いします。

市長：ありがとうございます。いいですね。そういうつながりも。

しかし、みやまえ日和のサイトも、要はこういうリアルの場というところで飾っても、そういう触れ方もあるけれども、要するにウェブ上でギャラリーも展開できるという、そういうコミュニティもつくれるんだという、そういうつながりづくりもできるんだよということを教えていただいたような気がします。

宮本さん、すみません、先ほどラジオも参加されていましたが、今は写真という表現の仕方でありましたが、宮本さん、いろんなものをプロデュースされているんだと思うんですけど。

宮本さん：そうですね。ちょっと自己紹介すると、もう東京のキー局のほうで30年間、番組制作をADからディレクター、演出、プロデューサーも全てやって、ちょっとテレビで培ったノウハウを地域の活性化のためにどう生かせるか、エンターテインメントのノウハウをどう生かせるかというところで、こういう取組、安藤さんともやらせていただいているというところが自己紹介です。

私が考えるアートというのは、基本的に人の心を動かすものであって答えではない。物事のきっかけづくりでしかないと思っています。それはもうテレビもそうで、見た方が何か行動を起こす、きっかけの1つでしかないんですよ。テレビ番組というのは。アートも同じで、結局アートだからこれが答えじゃなく、その先にどう動くかというところのきっかけづくりでしかない僕は考えています。ラジオもそうですよね。聞いていただいた方が宮前区役所に行こうと思う。そういう取組の1つのきっかけの橋渡しになればいいなぐらいにしか考えていないんですけど、あんまり大きいことは考えていませんが、遊休不動産というところと言うと、僕はちょっとあれを出したかな。

今、ちょうど有馬九丁目のほうの方と空き家対策の話を今してまして、それをどのように活用したいかが分からないみたいなおばちゃんたちがいて、僕はそこに入って、LINEグループができちゃって、おばちゃんと僕の。野菜を育てたよとか、そういう何か明るいLINEが来るんですけど、これをどうエンタメ化して楽しくして届けていくかというところを今、僕がつくってこうとしているんですね。

それも1つの、僕はライブ配信スタジオを空き家でやろうと思っています。今。それをまちの負の遺産を財産に変える。これを日本初、宮前区が空き家をライブ配信スタジオにし、地域の方々がMCをやり、地域のニュースを届け、さらに全国にそれを発信していく。これが僕のロードマップです。今。これがアートという1つのきっかけでしかないものが、僕の中ではライブ配信という。今日はもうライブ配信していただいていますけれども、まさに同業者の方々なんです。

つまり人の心をどう動かすかというところは、テレビで培ったノウハウを生かし、地域の活性化のためにどうライブ配信を実施し、負の遺産である空き家を今後財産にどう変えていくか。それは地域の方と一緒に取り組むことであると思っています。

今もう1つ、鷺沼商店会の方と月1で今、ライブ配信をやっているんですよ。それこそ駅前の、先ほど使えなくなった施設、あそこの2階で月1回ライブ配信をして、地域の寝具店の女将さんとか、夏のシーツはこれがいいんですよとか、はー、みたいな。すごい面白いんですよ。だから地域には地域のプロがいるんですよ。その方の情報がきちんと届けば、その方から買いたいなというファンマーケティングができると僕は思っているんですよ。大型店舗ももちろんいいですよ。だけど地域に根づいてやっている商店の方々のお話を聞いて買う。これがもう、これからのファンマーケティングを醸成していくことであると感じているので。

来週の月曜日、夜21時からGravityという鷺沼駅前にあるんですけど、Gravityさんから生配信をやりますので、よかったら見てください。面白い取組を一生懸命みんなで考えてやっています。こう言おう、あれ言おう、どうしようというのをみんなで考えながらやっているんで。

すみません。しゃべり過ぎましたかね。以上です。

市長：面白いですね。負の遺産を財産、価値あるものにしていく。

宮本さん：付加価値をどう作るか。

市長：そうですね。いや、面白い。

要は、例えば、今日の区役所のほうから最初に冒頭説明がありましたけど、いろんなものが展示できるスペースがない、アートを展示できるスペースがないという中で、でもどういうふうになく活用して、ない物ねだりじゃなくて、今あるものをどうやってうまく活用していくかという、そういう視点に立ったご発言だったというふうに思います。

ファンマーケティングの話がありましたけど、鷺沼ファンでやっている、ファンつながりで石川さん。

石川さん：そうですね、でも皆さんのお話を伺っていろいろ考えていたんですけど、何だろうな。

でも何かアートで、ちょっと美術館の話に戻っちゃうかもしれないんですけど、アートでつながるみたいなのは確かにあるかと思って、僕正直、普通にもう電車に乗って通勤している会社員なんで、あまりアートとか縁はないなと思うんですけど、もともとは。でも何だろう、僕2年前に鷺沼に引っ越してきました、そのときは鷺沼に知っている人とか1人もいなかったんですよ。でも何か、結構いろいろ面白いお店とかがあるなみたいな、それこそ、ふらっと宮前区とかを見て知って、こういうのを、僕もともと学生の頃に何か映画サークルみたいに入っていたんで、ちょっと短い30秒ぐらいのショート動画みたいなやつとかを撮って発信したら面白いかなみたいな感じで、インスタグラムとかで発信し始めたんですけど、アートと言えるほど全然大層ではないですけど、でも何かそういう活動していたら、結構あれよあれよみたいな感じでつながる方が増えて、鷺沼でとか、宮前区で暮らすのが楽しくなったなみたいなことを思っていて、だから何かもう少しやっぱりそういうアートでつながる体験みたいなのを増やしていけたらいいなと思います。

何ができるかなみたいな話で言うと、やっぱりさっきも、最初のところかな。課題にあったと思うんですけど、発表する場所が少ないみたいなお話ですかね。結構あって、いろんな場所で飾ってみようみたいなお話とかも今日もたくさんその講演のお話とか、朝倉さんの病院のお話とか、いろいろ出ていたと思うんですけど、何かやっぱりSNSでアートを発信するみたいなことをお手伝いできたらいいかなというのはちょっとと思って、それもやっぱりただ発信するというよりかは、さっき和泉さんとか、京森さんとかもおっしゃってましたね。そういうプロセスも含めてつくる、発信することで、何かより身近に感じてもらいながら、いろんな人にアートの魅力、宮前区のアートの魅力みたいなのを知って、その先で、ちょっと宮前区で暮らすの楽しいなみたいに思ってもらえることも増えていいかなと思いました。

市長：ありがとうございます。鷺沼に越してから2年間ですか、まだ。

石川さん：そうですね、今2年たちました。

市長：すごい急速な勢いでつながっていますね。2年間でこんなに友達を増やしている人というのは世の中にそんなに多くないと思うんですけどね。コミュニケーションの強さというのをすごい感じますね。

石川さん：ちょっとオフラインのコミュニケーションは弱いんですけど、オンラインは得意です。

市長：なるほど。すごいですね。

石川さん：本当ですか。

市長：安藤さん以外は、皆さんちょっとコメントいただいたんですけど、ちょうど15分までが第1パートなんで、ちょうどいい感じで今1人ずつしゃべっていただいたと。やっぱりここは最後は、安藤さんに少しまとめのような感じで、1部を締めさせていただくコメントをしていただければありがたいんですが。

皆さんのご意見を聞いていかがですか。

安藤さん：そうですね。私がまとめると、ちょっと全部とっ散らかってしまって終わりそうな気もするんですけども、やっぱりいろんな方に今回、私のほうからも集まっていたくようにお声がけさせていただいたんですけども、本当にいろんな職業の方々がいらっしゃるので、もう意見の幅がすごい広過ぎて、ちょっと私としてもびっくりしている、前回もそうだったんですけども、状態ですね。場所とかも本当に公園のことも広がりが出ましたし、何か可能性がすごい満ち満ちているような状態に思いました。

市長：ありがとうございます。いや、こういう車座は初めてだなと思って、作品がプロセスまで見えちゃっているという。もう45分間でここまでアートが出来上がっていくプロセスをみんなで見ながら会議しているって、すごい新しいなと思いながら、ちょっと感動的です。

<アートをマッチングする仕組みづくりについて>

市長：では、これから第2部で、今まで皆さんいろんなお立場から、いろんなアートの可能性とかいうものについてご議論いただきましたけれども、これからどうやったら具体的にマッチングしていくのかという仕組みづくりを考えようというふうなことです。できれば、今日全てを答え出すわけでは全くないんですけど、せっかくつながり始めたもので、1つでも2つでも具体的な、こんな形でつながるよね、可能性あるよねと言ったらやってみようというふうな形につながっていけばいいなというふうに思うので、確かにここの宮前の美術館というか、区役所美術館というのはもうプロデュースしていただいて、いろんな人たちが関わっていただいたことによって、今までになかったよねというものがつくり出せたと思うんですが、これが単発の話ではなくて、どんどんいろんなまちのあちらこちらでというふうな仕掛けというふうなのが必要だと思うんですね。

実は市民ミュージアムが、水害によって令和元年、台風のところで水没させてしまってというところから、今度は新たなミュージアムというふうなものが、生田緑地の敷地内のほうに移設をして始まるということなんですけれども、単純にもう一回新しいミュージアムを造りますということではなくて、そうではなくて、あそこはセンター機能がありながらも、まちの中で、まちなかミュージアムというふうなのを市内全域で広げていけばいいなというふうに思うんですね。

だからいろんな資源がある、この区役所もそうかもしれないし、空き家もそうかもしれないし、それこそ喫茶店なのかもしれないし、街なかのいろんな資源をどんどん、病院かもしれないしというところは市民の皆さんがアートというものを自らを表現していく場、あるいはそこで感じられるとか、鑑賞できる場もそうだしというふうな、いろんなところのまちなかミュージアムというのを、例えばことラーさんを中心にとかというふうな形で展開していく。

そこのミュージアムと街なかのいわゆる地域資源のミュージアムというのが、何となく親和性を持ったような形でつながっていけばいいなというふうに思っているんですね。まさに、この宮前から始まっている取組というふうなのを次々と展開していくことによって、市内全域がアートの世界になっていくというふうなのは、ちょっと妄想ですけど、思っています。

なので、ちょっとそのマッチングする仕組みについて、仕組みというかな、何だ、どうやったらできるんだというふうなことを、少し具体的な話みたいなのに移っていただければいいなというふうに思っていますけど。

もう一回、宮本さんから行きますかね。すみません。

宮本さん：何を話せばいいでしょう。

市長：つながっていく仕組みづくりですね。このテーマについて。

これ、休憩はないんですよ。そのまま通していくということですね。

マッチングする仕組みというふうなのを。

宮本さん：マッチングの仕組みか。

市長：いろいろと今の空き家の話まさにそうですね。

宮本さん：はい、もうまさにマッチングですし、マッチングとなると、やっぱりシステムのほうのバックグラウンドの話も多いなというふうに思いますし、それがもうほぼ全てというか、あとはアーティストの方と店舗をつないでいく、プロデューサーみたいな人が必要だったりとかという、マンパワーがある程度、意外とマッチングは簡単のように見えて泥臭い部分がありますし、本当に駆けずり回って店舗とアートをつないでいきたいんだということを認識させた上でのマッチングなので、そこをどれだけ人を割けるのかとか、簡単に仕組みというのはなかなか難しいなとは思いますが、マッチングの仕組みはちょっと一旦置いて、人がわくわくするものがどれぐらいそろっているかというところですかね。

アートといったって幅広いですし、絵だけじゃないしというところ。あとは、僕はテレビをやっているのは、メリットがないと動かないというのがあって、人は。そう簡単には動いてくれないという。だから基本何かの役に立つんだよというところの打ち出し方、僕はアウトドアの番組をもう4、5年やってきて、コールマンさんとかと、やっぱりアウトドアグッズでも防災にかなりひもづけられているんですね。もうあれさえあれば本当に生き延びられるなというぐらいのグッズがあるので、僕の家にもそれ全部そろっているんですけど。

そういった防災と言っちゃうとなかなかぴんとこないけど、アウトドア×アートという形から防災というところにひもづけていくとかという、人工の流れの導線のつくり方をうまくしていかないと、アート×防災ですと言っても人がぴんとこない、動かないという。今は富士山の件もあるし、防災にぴんとくる方もたくさんいらっしゃると思いますけど。

仕掛けの部分でいうと、キーワードが防災でいいのかどうかとか、もうちょっと柔らかい表現にしたほうがいいんじゃないかとか。ちょっとマッチングシステムは分からないです、僕は今。言えることとしては、どうやってアート×〇〇の部分に人が共感をしてくれるかというポイントを何個つくれるかによって、人の関係人口が増えたり、動きが始まると思うんですよ。

この安藤さんが考えられた、このプロジェクトにも共感があったから人がこれだけ動くし、その辺がなかなか難しいと思うんですよ。やりましょうでやるものでもないし、皆さん、本当に動かないから。自分事にどう切り替えさせていくかというのが、僕がふだん考えているプロデュース業の部分ですかね。

ごめんなさい。そんな感じです。

市長：いやいや、ありがとうございます。

渡邊さん、いかがですか。

渡邊さん：やっぱり思うに、マッチングを成功させるには、既存のインフラとアーティストがいれば物ができるマッチングじゃないかと思っていて、やっぱりここには施策もそうですけど、やっぱりストーリーが大事なんじゃないかと思うんですよ。なんでこれをやりたくなったのか、だから動くのか。バックキャストで落としていかないといけなくて、もう本当に今ライブアートでやっている、あのチョークも普通のチョークでやっているわけじゃないじゃないですか。あえてキットパスでやっている。何でキットパスが大事なのか。それは貝殻だったり、いろんなものが廃棄されるのを、何とかうまく有効利用して処理してあげたい。でもこれが、例えば遊びだったり、アートになったりするからというストーリーがあるから、みんな物を買ったり、川崎市で広めていく話になっているわけですよ。

多分ストーリーがすごい大事で、うちの病院も、病院をやっているんですけど、病院も前に、数年前まではコロナを診るために、コンテナハウスが幾つもあるんですね。コンテナハウスは処理するのに物すごいお金がかかるんですよ。だから、ある程度収まってきたら、単なるコンテナハウスが並んでいるだけになっているんですけど、この前コテツさんとか、ホリプロさん経由でスペルノーヴァの方々とかも話をすると、実はそのアーティストの方々は、おまえ部屋を見たことあるのかと、見せてもらったんですけど、小さい部屋の中に、もうでっかい作品が置いてあって、これ、寝られるのかというぐらい狭い部屋で一生懸命書いているんですよ。売れるまではここにどんどん置いていかなきゃいけないということになると、寝る場所もないんだというのがよく分かったので、この方々と自分たちの 이슈とどうやって結びつけるかというマッチングを考えると、だったらコンテナハウス、ほぼ無料でいいので貸しますと。

逆にそういう方々が夜中中でもいてくれると、うちはどうせクーラーもつけっ放しだし、警備員もいるし、電気絶対払わなきゃいけない。だけどその人たちが来てくれることで、セキュリティのレベルは上がるわけですよ。電気をつけっ放しになるし。彼らはレンタルスペースを借りたいんだけど、深夜は使えない。でも思い浮かんだときに多分書きたいでしょう。でも24時間使えるんですよ。そのスペースを、うちだったら。だったら使ってくださいで、今、実は病院の前のコンテナハウスは若いアーティストさん方に使っていて、アトリエとして使ってもらったりしています。だから何かお互いの問題点とお互いのメリット感を、うまくストーリーづけさせて動くから初めてうまくいくのかなと。

この前も万博でちょっとイベントをさせていただいたんですけど、万博のときもやっぱり理由があって、万博に行ける子供たちは楽しめる、まあそれはそうだろう。金を払って行ける。だけど、金を払ってでも行けない子たちだっているわけですよ。この子たちを何とかしてあげられないかというのが万博会場から話が来たので、自分はお手伝いをして、全国中の小児病棟とつないだんですけど、今日ちょっと資料をお持ちしているので後で見ていただければと思いますけど、多分このストーリーがあるから、このマッチングがうまくいって、物が広まっていって、それに対して、例えば今回もNHKさんとか情熱大陸をつくってくださったプロデューサーだとか、プロボノで映像をつくってくれたりしているんですけど、そういうのに広がって、いいものになっていくのかなと思っています。いかがですかね。

市長：いやいやいや、宮本さんも渡邊さんもおっしゃっていること、本当一緒だなというふうに思いますし、何かプラットフォームのルートをするような、マッチングするような何か組織があればそうなものではなくて、1つ1つに思いだとかストーリーというふうなのがあって、それに共感できるようなものというふうのじゃないと、誰も寄ってこないというか、そういうものにはならないということ表現していただいたというふうに思います。

皆さんいかがですか。

ちょっとプロデュース系ということで、和泉さん、いろんなことを仕掛けてられていますけど。

和泉さん：ごめんなさい、いま離席していて、ちょっと途中からしか聞こえなかったんですけど、何かすごいおっしゃっていること、よく分かるなと思って、ストーリーが、仕組みが先行しても形骸化しちゃうなというのはすごいあるかなと思って、それをどう仕組みと、多分今日の課題で言うと仕組みと、それを回すためのプロセス、ストーリー、ナラティブ性みたいなものをどうデザインするかだと思うんですけど、何か今ちょうど3人横並びですけど、4人鷺沼なんですけど、僕は鷺沼の駅が再開発されるに当たってのグランドビジョンというのを弊社のほうでつくっていて、その中の一環で、まちがどんどん再開発していくと、結局、フラットパネルというか、仮囲いがどんどん増えちゃって、寂しいまちになっていく。

それの中でもどんどん住み続けたいと思えるような、シビックプライドの醸成みたいなものを並行して行っていますという形なんですけど、その中の、それを例えば、いきなり線としてやるというよりも、どっちかという、僕は点をいっぱい打ちながら、それを線にして最後は面にするみたいな、何かそういうプロセスをデザインしているんですけど、その中の一環で、うちが経営している駅前の飲食店の壁面とかは、基本的にギャラリーとしても使えるしみたいな、そこで出会った人たちがどんどん主体性を帯びながらまちづくりに参加していくみたいなプロセスを今、描いているような状態なんです。

今フェーズ3ぐらいに入ってきて、ちょうど今、皆さんの力で、鷺沼のフリーペーパーみたいなのを作って、ちょうどこの間創刊したんですけど。何かこれもやっぱりシビックプライドというか、鷺沼のまちに住みたいとか働きたいとか住み続けたいとか、そういうふうにしてもらう人を増やしながらか、さらに言うと、関わることによってどんどん主体性を帯びながらかまちづくりに参加していくという、何か点から線に行くようなデザインの途中での今、行為なんですけれども。

何となくマッチングをいきなり線にするというよりも、点をいかにつくって、それをネクストで線にしてもいいのかなとか。何かそんな感じも少ししますけど。

市長：なるほど。鷺沼の駅前では、まさに、エリア的にどう点をプロットしていくみたいな作業を、今からいろんな人たちを巻き込んでやっていくというふうな形ですか。

和泉さん：そうですね。一応場所としてはさっきの安藤さんの活動されている場所があったりとか、あと我々が経営している飲食店があったりとか、何かいろんな、稲木さんの不動産の店舗があったりとか、多分いろんな結構、何かすごいプレーヤーたちがいっぱいいるんですけど、そういう人たちがみんな力を合わせて、そういうことをやり始めることによって、点がどんどん線になって、1つの成果物を目指していくみたいな。

ただ、いきなりそれをやるというよりも、どっちかという、個々がすごい、スーパープレーをずっとしている人たちがいっぱいいるじゃないですか。どのエリアでも多分すごいプレーヤーたちがいっぱいいるはずで、何かそういう人たちと話しながらか、どういうことをやろうよみたいなことが、点がしっかりしているんで線になっていくみたいな感じなんですけど。

そうですね、我々は今そういうフェーズにいる感じですか。

市長：ちなみに今日ここに集まっていたいてる方たち、皆さん大体ご存じ、お互い知り合いですか。つながっていたりします。半々ぐらい。

例えば京森さん、皆さん、この辺ご存じですか。

京森さん：いや、知らないです。

市長：なるほど。宮本さんは。

宮本さん：ラジオで朝倉さんと和泉さんと。石川さんはこの間、別件でお話した。

市長：なるほど。だから、何となく今日この場で、この人こういうことをやっているんだみたいなことが分かってくるということですか。

朝倉さん：話していてめちゃくちゃつながるイメージがめちゃくちゃあるんですけど。

市長：そうですね。朝倉さん、鷺沼でとおっしゃっていますものね。

という形からすると、本当そうですね。新たなつながりというふうなのは、また点が生まれていきそうな気がしますね。なるほど。

でもこれ、本当にまだ、アーティストの方だとか、こういうことに興味がある、あるいはアーティストじゃなくても、例えば福祉施設の皆さんだとか、こういうような取組をやっているんだ、あるいは病院だとか、診療所だとかというふうな、いろんな方たちも、渡邊先生のように何か、こういうのだったら使ってもらったほうがいいんだけどなみたいなことを、そういう取組みたいなのは、なかなか気づく人はそう多くはないと思うんですよ。

だから、どうやってそこを立たせていくかなという、その気づきに変えて、面白い、自分も参加しようかなというところまで持っていくかというのは、すごく先ほど宮本さんがおっしゃったように、そんなに人がもうめちゃくちゃぱっと動くわけじゃないよと。なかなかお尻は重いみたいなことなので、どうやったらそこが出てくるかなというのは、和泉さんからすると、面白いものを点でスーパープレーヤーがぽんぽんやっていると、そう立ってくるという感じですかね。どういう感じだろうか。

和泉さん：そうですね。今、鷺沼の駅前でやっているSUBURBという飲食店もそうなんですけど、一方、中原区でやっていたCHILLという複合施設もあって、これは食とアートと音と映像と、4つのキーワードを基にやっていた複合施設なんですけど、京森さんもそこにいらっしゃっていて、何かそこかは京森さんのようなすごいアーティストさんとか、あとほかにも結構今、全世界で活躍しているアーティストさんとかもいたりするんですけど、そういう人たちを際立たせるというのちょっと失礼ですけども、そういう人たちがいるんですけど、ただ、飲食店なんで、1日何百人の人が普通にご飯を食べに来る。

その普通にご飯を食べに来る人が、ちょっと言葉を選ばずに言うと、強制的にアートに触れるみたいな、何かそういう動線デザインをしていて、なので、飲食店は通常のセオリーではなかなかないと思うんですけど、3階建ての3階にありますと。普通路面店にあったほうがいいと思うんですけど、経営だけを考えると。ただ2階のアートゾーンを必ず通っていかないと飲食店に行けないというデザインをしていて、そうすることによって、ふとした、ただ歩いているだけなんですけど、アートが押し寄せてくるみたいなものをやっていたんですね。

なので、何ていうのかな。スーパープレーヤーたちみたいな人たちがいることによって、そこを通るみたいなデザインをすると、必然的に普通にご飯を食べに来たという、そうじゃない、さっきお尻が重いと言っていた人たちとかも、普通に触れられるということをゾーニングとしてデザインしてあげると、意外にそういう人たちも、何だろう、少しボトムアップをしていくというか、ちょっと言葉はすみません、選ばずに言うという感じなんですけど。

市長：なるほどね。ありがとうございます。

ちょっと今までのところを聞いていて、困ったので、齋藤区長に話を振りますが、どうですかね。今、聞いていて皆さんの。

区長：そうですね。ちょっと初めて今日しゃべりますけれども、そもそも私もアートは、すごく今まで話を聞いていて、狭い範囲でしか考えていなかったの、写真、絵とか、そういう物でしか捉えていなかったと思うんですけども、やっぱり今ずっと話を聞いてみると、結局アートで何がという、人と人とのつながりが今、大事なんだという話に落ち着いてくるのかなというふうな、自分の中ではちょっとそういう形で。

今、最後のほうで和泉さんが言いました、人が、スーパープレーヤーがいれば、そこから少し広がっていく、線になっていくというような話というのは、ふだんの我々が言っている、いろんな場面でのこれから必要になってくる人と人とのつながりみたいなところの、まさに同じ話だなと。そこにアートがどういうふうで開催して、それにつながっていくのかなということを今、考えていたんですけども。

そうやって人がいるところは、自然に多分そうやって広がっていくというものも生まれているんだと。今まで聞いていた中では、もう既に宮前区の中に、この中の人たちがつながって、いろんなことをもうやられているということも分かりましたし、その中で私が知っていることも本当に少なかったという、本当に一部分しか見えていなかったなというのを感じましたので、行政のほうが無理くり何かやらなくても、皆さんが自分たちの力でいろいろ動いているということがよく分かりましたので。

それが、そういうスーパープレーヤーがいない場面で、じゃあ行政としてどうやって関われるのかなとかということ、それがマッチングで必要な部分になってくるのかなというところを今、聞いていて感じたところです。まだ全然、ですから答えとして自分の中でもできていないんですけども、この場を提供したりとかという、何か仕組みをこういう仕組みですというふうに用意するよりも、自然に皆さんのやっていることを紹介したり、表に出していけば同じようなものが生まれてきたりするんじゃないかなんていう、そういった可能性もちょっと感じてみますので、どういう形がいいのかというのは、ちょっともう少しお話を聞きながら私も考えたいなというふうに思います。

市長：ありがとうございます。

この区役所での取組を、安藤さんはどうやって人をつなげていったんですか。

安藤さん：先ほどちょっとお話ししたように、3年半ぐらい前から、私自身が、都内での仕事はそれまでしていたんですけど、そうじゃなくて自分が歩いていける範囲で活動しようと思って、まちの様子を見るとき、自分で歩いていける範囲の場所でつながり始めたんです。それが何だったかという、お祭りに出て、そこにいらっしゃる、ちょっともう今、帰られたんですけども、高齢の方がいらっしゃって、その方に話したら、その方が誰かを紹介してくれたりとか、本当に誰かが誰かを紹介してくれたりとかというものも多くあったなという印象ですね。つながっていったという。

市長：ここのいわゆる区役所での活用みたいなミュージアムというふうなのは、これはアーティストだとか、例えば宮本さんにつながっていくとかというふうなのは、どういうふうな話なんですか。

安藤さん：例えば宮本さんで言うと、鷺沼に鷺沼商店会とかの副会長をやっていたらっしゃる佐々木良司さんという方がいるんですけども、その方と、みやまえBASEでつながりまして、みやまえBASEの中で、佐々木さんから、何て言ったらいいんでしょう。こういう会議があるよというので教えていただいて、その会に出席すると、宮本さんがいたというような状態で、何か自分が出向くことで、つながったご縁というのが、今のこのつながる美術館をほぼほぼつくり上げているという状態ですね。

市長：なるほど。ということは宮前区のソーシャルデザインセンターである、みやまえBASEが1つのハブにはなったということですか。

安藤さん：なっています。

市長：なるほど。そうか。というのは、こういうつながる美術館みたいな取組が区内のいろんなところで次々とできていく仕組みというのは、一体どういうふうになったら、つながっていくんだろうかというのは、せっかくだからこういうのは、至るところでやりたいじゃないですか。

安藤さん：ありがとうございます。

市長：なので、そうしたらそれをやるためにはどういうふうにしていったらいいんだろうというのが、ちょっと、そのストーリーが大事なんですけど、誰がまず、皆さんという、参加しませんかという手を挙げるのと。それに、その共感するストーリーがあって、皆さんがつながってくるんでしょうけど。いや、結構それなりに泥臭くやったりやらないと、結構大変な話だと思うんですよね。区役所でのこのつながる美術館も結構大変な話だと思うんですけど、こういうものが持続的にやっていくためというふうなのは、それなりに何らかの、仕組みづくりのことばかり言ってもしょうがないんですけど、でも、どうやったらそれが仕掛けていけるのかというのじゃないと、このまま終わったら次につながりませんでしたというのだと、ちょっと寂しいよなと思うんですけど、そこの、もうワンひねりみたいなものというのを、ちょっと誰か教えてもらえませんかということなんですけど、いかがですかね。

お願いします。朝倉さん。

朝倉さん：今ちょっと皆さんのまた話を聞いていて思ったんですけども、私ちょっとカイロプラクティックの関係でアメリカのニューヨークに住んでいた経験があるんですけども、特にマンハッタンというあの土地は非常に狭いエリアの中で、今、聞いていて思ったのがマンハッタンはすごく特徴的で、ゾーニングがすごくしっかりされている。自然発生なんでしょうけれども、例えば昔かつてデザイナーの若手の人たちがソーホーに集まり出したとか、若手のアーティストだったらオフブロードウェイじゃない、僕が住んでいた、何だっけ、ロワーイーストサイドとか、そっちのほうに自然発生していくとか、ブルックリンのほうで黒人主体の何かが集まっていくとかという意味で、ある種のさっきの点の、点というか、シールのつながる絵があるじゃないですか。それと一緒に、どこかにプロットしたときに、そこから自然発生してくるこのゾーンが強化されていくというのかな。

今、皆さんがそれぞれ点で活動しているのが散らばっていると、なかなか集合していかないんですけど、さっき誰か貼ったときにその周りに何かシールを貼られていたというような話もあったように、何か、例えば区の中で特区じゃないけど、こういうことはここでやっているよねみたいな、その認知しやすいポイントがあると、そこに集まっていく。まさにさっき宮本さんがおっしゃったように、例えば有馬の何丁目が分からないけど、何とのここというところが最初の一点かもしれないけど、その周辺で何かアーティストなりとか、何かこういうことやりたいという人が集まれば、あそこに行けばこういうことをやっている人たちがいるよねみたいなことが自然発生していくような、そのエリアのゾーニングをちょっとつくっていくような、きっかけを最初に立ち上げていくのがいいのかなみたいな。

そうすると、ソーホーに行けばデザインだし、ミートパッキングエリアに行けばレストランだし、ジャズがいっぱいあるしとか、何かそういうのがイメージが湧きやすいじゃないですか。そうすると、そこに動線

ができるんで、例えば路線バスのあれが活性化していくのかとか、あそこへ行くんだったらもうこの路線がもう一番Aラインに近いあそこだとかというのが分かりやすくなっていくように、何かそこが強化されていくのかなというふうに、ちょっとまだ漠然とですけど、そんなゾーニングの必要性みたいなのを感しました。

市長：なるほどですね。ありがとうございます。

何か先ほど渡邊さんが病院で電気代は払っているし、セキュリティ上、いてくれたほうがむしろいいんだよというふうな、そういうものをつなぎ合わせるというか、どうやればいいのかなというのは、例えば公園をもう少しうまく使いましょうというふうにやったときに、例えば小林さんのところが公園も少し管理をさせていただいているというふうな話から、もう少し、例えば、ここから宮前区に1つだけしかないそういう公園というよりも、例えばアート公園の回廊をつくりましょうというか、回廊というか、4つ、5つポコポコと、そういうことをやっている宮前区の公園はそんなことをやるんだというふうなのが周知されていくというふうな話になっていくと、何かとても面白いよなと。

今、さっきの特区の話じゃないですけど、宮前区の公園はそういう活動がなっているんだよねというのは、あそこのルー大柴さんの健康体操は宮前区すごい盛んですけど、ああいうような形で宮前区の公園は、こういうアート活動が結構あるんだよねというふうなのが、ポコポコできてくると、何となく雰囲気が出てくると。

それには、例えば、道路公園センターと地域の方たちと、その地域に、近くにいらっしゃるアーティストなのかもしれないし、あるいは病院なのかもしれないし、施設なのかもしれないしというところの、ひとつこういうところのチャレンジをしたいんだというふうなものが、それぞれの公園にテーマがあってもいいですし、そんなような形というのはどうかなと、今、皆さんの話を聞いていて思ったんですけど、どうですかね。

小林さん、何かご意見ありますか。

小林さん：ありがとうございます。すごいいいと思います。

市長：何ていうか、子ども食堂にも関わってもらいたいし、地域の人たちだとか、あるいは診療所の人たちかもしれないし、いろんな人たちに関わってもらいたいと。でもそれが食べ物とプラスアルファの、例えば公園でもこういうふうなつながり方をしましょうといったときに、いわゆるストーリーを書いて共感してくれる人たちが公園で表現していくとかというふうなのはありますよね。

小林さん：もうすごくいいと思います。

市長：そうすると、何となくやっている子ども食堂だとか、カフェだとか、みんなにとってのいい循環に入っていったら、何か面白いスポット、ひいてはちょっとエリアというふうになっていくのかなという気がしますね。

小林さん：本当、すごくいいなと思っていて、自分が管理をさせてもらっているというところで、やらせてもらっていることが、公園の看板作りというのをやらせてもらって、その看板は大きな木の板に子ども食堂のときに来てくれた子供たちと、みんなで絵を描いて、それをその公園の看板にする、掲示板にするというのを川崎市の方に協力していただいて、やらせてもらったんですけど、やっぱり地域の方がこうやって参加をして、何かちょっとでも関わる、それが公園に看板として設置されるとかということが、地域の人たち、参加した人たちにとっても、その公園に少し愛着が湧くとか、公園に行くのが楽しくなるとか、何かそうい

う1つの楽しさ、人と人がつながるとか、そういうことになっているのかなというふうに思いながら、やらせてもらっているの、そういった公園をアートで、何か盛り上げるというか、楽しむというのはすごくいいなと思いました。

市長：ありがとうございます。

京森さんのベンチの、この区役所でのベンチのプロジェクトをやっていたことによって、ある意味、規格された市販のベンチというものが、世界で唯一のベンチになってくるわけじゃないですか。そこで初めて、私たちの区役所のベンチというふうになっていくというような気がしてまして、今、公園も行政が持って管理をして、そして地域の皆さんにかなりの部分をお手伝いいただいて、メンテナンスしていると。だけどあくまでも公共という、いわゆる公のほうですね。共というよりも、公のほうの公園になっていて、コモンズにはなっていないと。市民の共有財産、私の、私たちの公園というふうになっていないというふうなのが、実はすごく大きな課題だと思っていて、そうしていくためには、少しそういった、例えばベンチ1つ、そうなんですけど、画一的なものから自分たちのものにしていくという、そのプロセスというのがとても大事だなというふうに思うんですけども、京森さん何かコメントいただいてもいいですか。

京森さん：私たちのものというふうに感じるということ、そうですね。

ベンチ、参加してもらいながら行うということは1つ、そういった地域の人を、あそこのベンチ自体は1000人の子供の手の記憶というお名前、タイトルにしているんですけど、そこに関わった子供たちの、それぞれがそこに参加したことで、大人になったり、いろんな成長して、でも公園というか、その広場にあるベンチはずっとあり続けて、そこに、それを見るだけでとか、そこを利用することで、その都度記憶として何か思い起こさせるものもあるなと思いつつ、それと、地域の方があそこにああいうものがあるってという、その場所にカラフルなベンチがあって、それが大人になったり、関わっていない人でも、あそこで利用することで記憶として残っていくみたいなことが1つ、ああいうパブリックな場所にあるアートとか、何か作られた物の価値なのかなというふうには思っていて、ただ、全体のことをちょっと聞きながら思っていたことは、さっき言われていたように、人はなかなか動かないよみたいなことがあって、それは、何かしら利益というか、何かしらの目的意識を促すようなものがないと、1つ動かないみたいなものがあるなとは思っていて、それは1つ予算だったりもするかもしれないし、社会的な意義をその人が感じるかどうかだったり、いろんな要素が入ってくるんじゃないかなと思っていて。

美術家の視点でちょっとお話をさせていただくと、もともと展示したい区民と展示したい店舗みたいなところが、前回のお話の中であったときに、アートを自分で作りたくて、でも駆け出しのときとか作っていくんですけど、展示する場所というところがやはりないという中で、その情報を知ったりとか、どういう場所があるんだろうとか、あとは、アートはいろいろな言葉とか意味合いとかがあるなと思っていて、駆け出しの作家さんとか、アートだけで生活をしていきたいとなると、そのアートを飾って、それを販売につなげていって、それを生活の糧にしていかなきゃいけないというフィールドワークになってくるかなと思っていて、それとは別のアートもあるなと思っていて、生きづらさの中で生まれてきたものとか、自分がこれを作って人と共有したいよみたいなものたちもいっぱいあるんじゃないかなと思っていて、そういったものたちと、以前の座談会のときに、カフェをやっている方がいて、その方は展示するスペースがあって、情報が共有できていないんじゃないかということで、そういった人同士がどうやって知れるかみたいなことの中で、何かマッチングできる可能性を探ったらいいんじゃないかなみたいな話が上がったと思っているんですけど。

さっき言っていたアート活動をしている人だと、場所性とか自分が活動するのにその場所でやる意義とかということを考えざるを得ないことが結構たくさんあるなと思っていて、ちょっとうまくまとまらないん

ですけど、そうですね。場所、ごめんなさい、ちょっと分からなくなって。

市長：いやいや、ありがとうございます。やっぱりアートの、ちょっとざっくりした言葉ですみません。アートのまちというふうになっていくためには、いわゆる生態系がちゃんとになっていないとなかなか難しいと思うんですね。アーティストが住みたいとか、アーティストが次々に生まれてくる環境だとか。先ほど今、宮本さんが言われたような展示する場所があるとか、見てもらえるとか、表現を評価してもらえるステージがあるとかというふうなものがないと、何となく生きづらいエリアになってしまうので、そういったものを、その生態系をどうやってつくっていくかという感覚で考えていかなくちやいけないと思うんですけど、そこに若干の、ご指摘されたように、人が、物が動くためには、やっぱりファイナンスのところがすごく大事だと思うんですね。お金がどういうふう回るのかというところじゃないと、みんな全員どこまでが手弁当でできるんだろうとかというふうに思うと、それもどうやってやるかというのを考えなくちやいけないと思うんですけど。

先ほど朝倉さんがニューヨークの話をされていましたんで、ニューヨークのマンハッタンにある、あるすごい、とんでもなく治安の悪い街なかの公園が、物すごくきれいにすることによって、維持管理を徹底的にやると。そうすることによって周りの不動産価格がざっと上昇して、その平米当たり、本当に僅かのお金を、地価上昇分を乗せて、そこを皆さん、オーナーからいただいたものを、公園の維持管理に回していくという、世界で最高の公園になっていっているというような、そういう仕組みづくりがあるわけですね。

そういうものというのを、どう、先ほど言った緑のところも、アートのところも、どうやって回していくか、持続可能にというふうなことをやっていかないと、何となく、いわゆる税金でもってずっと回していくというのは、それは全然持続可能なスキームではないので、どういうふうに1つ1つのストーリーを、どういうストーリーだから、こういう人に入ってもらって、そのファイナンスもどうやってやったらいい形になるのかなということも考えていかないと、なかなか持続可能にならないなというふうに思っているんですね。

ですけど、大分時間がきているので。

お帰りなさい。ありがとうございます。

物すごく今日のまとめ方がもう、いまだかつてないほど、車座、まとまらないんですが、しかし今日はめちゃくちゃ刺激的だし、次につながるなというふうに思っています。課題を次に持ち越していくということがすごい大事だと思うんです。今日いただいたようなお話というのを、どうまちづくりに、区づくりに生かしていくのかというふうな、いろんなヒントがあったと思うので、これを、こういう形で、まず公園、こういう形でやってみました、鷺沼のエリアで一緒にこういうふうな形でやってみましたという、点を打つというふうな、いくつかの点を打ってみようということにはつながったというふうに思います。

今日お集まりのメンバーもそうですし、これからもっと関わってもらいたい人たちというのを掘り起こしていくというプロセスも、これからやっていかなくちやいけないので、それぞれやっぱり分野があるので、例えば不動産の業界で言っても、鷺沼中心から宮崎台のところにも声をかけておくよというふうに言うただくだけでも広がりが出てくるしということを少し協働で、最初に動かすときは、やっぱりすごくパワーがいる話だと思うので、最初に一緒にやらせていただけないかというふうなのが、ちょっと今日の私の感想と、若干のまとめみたいな話にさせていただきました。

武藤さん、お帰りなさい。すてきな作品ができつつありますが、ちょっとコメントと、今いろんな議論していたんですけど、思いをちょっとお願いします。

武藤さん：ありがとうございます。ちょっと上で話、聞けないかなと思ったら全然聞こえなくて、すみません。全然ちょっと。私の絵のコメントだけちょっとさせていただきます。

見に来ていただいていた方にもちょっと手伝っていただいたりしながら、ここまで完成させることができました。宮前区、コスモスの花、区の花コスモスと、あと街と山と、それがつながって希望になるような、そんなイメージで描かせていただきました。

ちょっとまだ完成していないところが若干あるので、この後15分、30分ぐらいだけ描かせていただいて、完成とさせてもらえればと思います。ありがとうございました。

市長：回しが下手で、皆さんの2巡目、全員行っていないので、ちょっとこれは言っておきたいというふうな方がいらっしゃる、最後コメント、1人、2人、行けますが、いかがでしょう。

では、石川さんからいきましょうか。

石川さん：ありがとうございます。そうですね、何かやっぱりストーリーが大事だみたいな話を、結構今日すごい身にしみたなと思って、あんまり全然システムみたいな話まではいかないんですけど、僕、最近、さっきちょっと宮本さんのお話にもあった鷺沼のGravityさんというお店の動画を撮ったんですけど、それは、Gravityさんがどういう思いで、どういう経緯でお店をやっているかみたいなことを物語を語る、ストーリーを語る動画を作ったんですけど、それは結構3万回ぐらいかな、見ていただけて、1か月で30人ぐらい、実際にお店に来ていただけたんですね。

やっぱり何かそういうストーリーで人が集まるというのは、めっちゃ確かにあるんだなというのを結構実感して、だから何かアーティストの方のストーリーみたいなのと、展示したいお店のストーリーみたいなのを、さっき和泉さんがおっしゃっていたCHILLの事例みたいな感じで、うまく組み合わせて、新しいストーリーを作る動画みたいなのを撮ってみたいと思いました。

市長：ありがとうございます。もうそれで1本立ちましたね、何か。それはすごくうれしいです。最後の最後で素晴らしいコメントというか、宣言みたいなのをしていただいたので、よかった、1つ何か具体的なものが、よろしく願いいたします。

石川さん：ありがとうございます。頑張ります。

市長：宮本さんは。

宮本さん：最後の言葉としてふさわしくないと思うんですけど、ばかになりませんかという。僕はこれ、石川さんと和泉さんに言ったんですけど、スポーツ阿波踊りを開発したいんですよ。みんなで、もうやろうよと盛り上がっているんですけど、勝手に、僕が。フロントアウンの加藤さんにもそれを伝えようと思ってます、今度。もうとにかく駅前とかで、僕たちが阿波踊りをして、カロリー消費をきちんとできる先生に計算していただいて、病院の中も僕たちが練り歩くんで、おじいちゃん、おばあちゃんは両手だけでやってもらう。子供たちは子供たちで、僕たちの周り、駅前で俺らが勝手にやっていたら、何かばかな人があるな、鷺沼ということで、愛していただけるんじゃないかなと。

まず、ばかな僕たちを見ていただいて、面白いことやっているな、じゃあ私たちもやるよというところから共感を得て、ストーリーをそこから皆さんと一緒につくっていくと。その先にこのメッセージというか、こういうものが皆さんと構築していけると思うんですよ。まずは、ばかになってみたいと思っております。

以上です。

市長：ありがとうございます。もうその話は進んでいるんですか。

宮本さん：全く進んでいないです。みやまえアートラジオで勝手にしゃべって、もうやろうよと言って、どうしようかなと思って。福田さんだし、言っておこうかなと思って。福田さんもぜひスポーツ阿波踊りを先頭を切ってやっていただいて。

市長：受け止めさせてください。

宮本さん：それまで大丈夫です。

市長：ありがとうございました。

それでは、時間になりましたが、今日は本当に最後、何かがまとまるということではなく、これからさらに進めていくための1つの大きな、前に進む一歩になったのではないかなというふうに思いますし、何かすごく勉強になりました。お互い学び合ったような感覚の車座ではなかったかなというふうに思っています。ご協力に心から感謝申し上げます。

最後に齋藤区長から、どうやってこれを生かしていくかという、宣言みたいなのを、ハードルを上げていきますけど。

区長：はい。ばかになります。言われなくても、もともとばかなんで、今みたいな話は、私もすごく楽しく思いました。まずやってみるということも大事なかなというふうに思います。

先ほどの1個立ちましたという話じゃないですけども、それが本当にいくつか出てくれば、さっき言った点が線になるし、宮前区ってこんなことをやっているんだということも発信できていくのかなというふうに感じました。

そこに、行政が、区役所がどうやってお役に立てるのか。本当に一緒に考えたいと思います。アイデアがあれば、どんどん言っていただきたいですし、それを聞いて、まさに次にこういう人をつなげればいいんじゃないかという話も多分できるでしょうし、それがなくても皆さん今話の中で、先ほども言いましたけれども、本当にいろんなジャンルの方がつながっていているんだということも実感できましたので、それを生かして、今後ともさらに発展させていくというか、つながりを広げていくというようなことをまずやりたいなと思います。今日はありがとうございました。

市長：まとめのまとめじゃありませんけど、やっぱり最初に言われた渡邊先生が日常のものにアートというような、その要素を入れていくと、やっぱりちょっと違うレベルというか、突然面白いものになっていくとか、違う価値を生み出していくというふうな、その印象というのはすごく今日、強く残りました。

ですから、いろんな取組を重ね合わせることによって、宮前区って楽しいなと、宮前区って住んでみたいなというふうな、そういうような、かつ、個々人がそれぞれのウェルビーイングにつながるような、そんなような取組が次々と生まれていくような、ちょっとそんな予感をした車座集会になりました。貴重な皆さんの時間をいただいて本当にありがとうございました。

司会：皆様ありがとうございました。

以上で、本日のテーマ、「アートでつながる宮前区」の意見交換は終了となります。

皆様、ご協力いただきまして誠にありがとうございました。

以上をもちまして、第76回車座集会を終了いたします。

本日はご参加いただき、誠にありがとうございました。